今年も省農薬ミカンをお届けいたします。ありがとうございます。

【配送ラベルの確認を！】配送されてきた段ボールに張り付けられている配送ラベルをご確認ください。茶封筒が間に挟まれており、その中に請求書もしくは贈り状が入っています（大学でのお渡し、またはゼミ員による配達でお渡しした場合は、茶封筒は挟まれていません）。

【ミカンを長持ちさせるために】箱の中のミカンを一度全部新聞紙の上に広げて、一晩ほどそのままにして表面の水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しの良い所で保存してください。また、傷んだミカンが見つかりましたらすぐに取り除いてください。

巻頭言

農薬ゼミと省農薬ミカン園の40年

石田紀郎

昨年の本ニュースレター巻頭文の書き出しも猛暑か酷暑であったように思う。今年はもう一段上の言葉が必要かと思えるほどの厳しい夏を過ごして来た。9月末になってやっと一息ついている。皆さんも同じ夏を無事に終えられたことと思う。ミカンの木は暑さに強いだろうが、秋の実りに酷暑が影響していないかと心配である。

今年も省農薬ミカンを購入していただきありがとうございます。昨年の巻頭文は栽培農民の仲田尚志さんの逝去とこの園の継続への不安を報告した。そして、大柿肇さんという後継者が見つかり、この1年余の間、ミカン栽培農家としての研鑽を積まれ、お届けするミカンを収穫、出荷してもらえた。農薬ゼミとしても、今までにないミカン栽培・経営とのかかわりを経験させてもらい、再度、省農薬ミカン栽培になぜ自分たちが関係しているのかを考えるきっかけとなった。この園にかかわり出し、調査を開始したのは1978年であった。40年間もひとつの園を見続け、病害虫の発生や収穫量を記録した事例はたぶん他にはないと思う。途切れることなくやり続け、後継者につないでくれた多くの人々に感謝である。

思えば筆者がこの村（当時は和歌山県海草郡下津町大窪）に初めて来たのは1972年ころだった。1967年に一人の高校生が農薬散布後に農薬中毒となり、死亡した。当時はよくある事件であり、論議されることもなく消えていったできごとである。しかし、この高校生の両親は人々に訴え、国会でも議論され、息子松本悟さんの死をムダにしたくないと、裁判所に提訴され、農薬会社と国に論争を挑まれた。我々が「農薬裁判」とか「ニッソール裁判」と呼んでいる、我が国で初の農薬中毒を俎上に上げた裁判である。1985年の大阪高裁での審理後の和解で決着するまでの長い闘いの仲間の一人として筆者も参加させてもらった。悟さんの叔父・仲田芳樹さんが新しいミカン園を開拓され、農薬を使わない栽培をと決意されたのは1973年頃のことである。まったくの素人である筆者は裁判をより深く考えるためにも、このミカン園と付き合ってみようと思い、「栽培はわかりませんが、病害虫や収量の記録を採らせてください」とお願いした。1978年から今年まで、京大の学生や教員や市民で立ち上げた自主ゼミ：農薬ゼミのミカン園通いを続け、病害虫発生程度と収量を途切れることなく40年間も記録している実践的な研究教育活動は他にない。さらに、単なる科学的記録だけを目指したのではなく、農家が生計を維持し、農家として生きていけることを保証する責任を負った実践であり、そのことを若者が背負ってきたことがもっとも評価できると思う。昨年からの事態は予想だにしなかったことであるが、地元の農家や親戚の方々のお陰で、新しい生産者の誕生と省農薬ミカン園存続ができた。これからも農薬問題を考え、安全な環境で、安全なミカンを、安定的に生産し、農家と消費者が喜びを分かち合える農業の継続のために農薬ゼミも引き続き活動したいと思っている。

いしだ のりお

▲2019年5月11日、ミカン園にて

【目次】

巻頭言	石田紀郎	2
お召し上がりの前に		3
昨年の販売について		3
病害虫調査報告	奥村颯斗	4-5
昨年のアンケート結果	河原田涼太	5
生産者へのインタビュー	菅野伸哉	6-7
農薬散布、試行錯誤中！		7
2019年ゼミ活動報告	内藤聡	8
新人レポート		9-11
みかん山ピザパーティー	長瀬由佳	12-13
交換留学生との交流	飯塚益美	14-15
省農薬ミカンとは		16

【お召し上がりの前に】

①見た目は悪いけれど…

ミカンには黒点病という病気があります。ミカンの皮の黒い点々がそれです。安全上問題ありませんが見た目に劣るため、黒点病のあるミカンは市場にはあまり出回りません。そのため、市販のミカンでは年4回ほどダイセンと呼ばれる農薬を散布してピカピカのミカンを作ります。対して、今年度の省農薬ミカン園では、ミカン園を維持するために最小限必要と思われる農薬（3月にマシン油乳剤（殺虫剤）、7月にモスピラン殺虫剤・ストロビーDF殺菌剤・スプラサイド殺虫剤の混合液）を散布しました。

②防腐剤を使っていない

私たちの省農薬ミカンは防腐剤を使っていません。防腐剤がなくてもきちんと保存をすれば長期間食べられますし、ミカンの皮を料理や入浴剤に使われる方にとっては防腐剤が入っていないほうが気持ち良いのではないでしょうか。傷まないように気を付けながら保管・出荷を行っていますが、皆様に届いたミカンのいくつかは既に傷んでしまっているかもしれません。それでも、それを省農薬の「こころいき」と捉えてくださったならば、私たちとしては本望です。できるだけおいしい状態でお送りするよう努力していますが、ご期待に沿えなかった場合はご容赦願います。

◆ ◆

昨年の販売について

昨年度はミカン販売において多くのお客様に大変ご迷惑をおかけしました。改めてお詫び申し上げるとともに、この度の不手際についてご説明致します。

注文の早期締め切りについて

前年度に比べ園面積が減ったこと、ミカンが裏年のため出荷見込みが少なかったこと、また生産者が新規就農の方に替わり収量予測に不安があったことから、出荷量を少なく見積もったうえでの注文受付を開始しました。そして宅配便前半の締切日に近づくにつれ例年よりも早いスピードで注文をいただいたことも相まって、最終的には11/10をもって注文を締め切らせていただくことになりました。このため大学渡し・宅配便後半でご注文予定であったお客様にはお知らせしていた日付よりも早くの締め切りとなりました。

宅配便後半をお届けできなかったことについて

夏期の摘果作業の遅れによりミカンの平均サイズが小さかったこと、そうか病により品質の悪いミカンが多かったことから、想定外に少ない出荷量となることが12月中旬に判明しました。そのため宅配便後半にてご注文いただいたお客様には、注文日に関わらずミカンをお届けすることができませんでした。

このようなミカン不足のリスクを減らし、またお届け方法の不平等性を改善するため、今年度は大きく3つの方針転換をしました。

①お届け方法に関わらず注文締め切り日を統一する。

②出荷見込みよりも少ない量を上限として注文受付をし、お届け方法それぞれの箱数にも上限を設ける。

③宅配便の前半・後半を廃止し、発送を先着順とする。

大きな変更により皆様に再度ご不便をお掛けするやも知れませんが、注文販売をよりよくしていくための取り組みとしてご理解いただければ幸いです。

▲去年収穫されたミカン。例年より小ぶりのものが多かった。

病害虫調査報告

奥村颯斗

私たちの省農薬ミカン園では農薬を減らした農業は可能であることを示すために、また今後の病害虫対策に役立てるために、毎年8月と10月、調査園にある約400本のうち50本の木を調査木として調査を実施している。ここでは昨年10月と今年8月の病害虫調査結果を報告する。今年は新メンバーがたくさん加わり、ベテランメンバーに指導されながらの調査となった。

【ヤノネカイガラムシ発生状況】

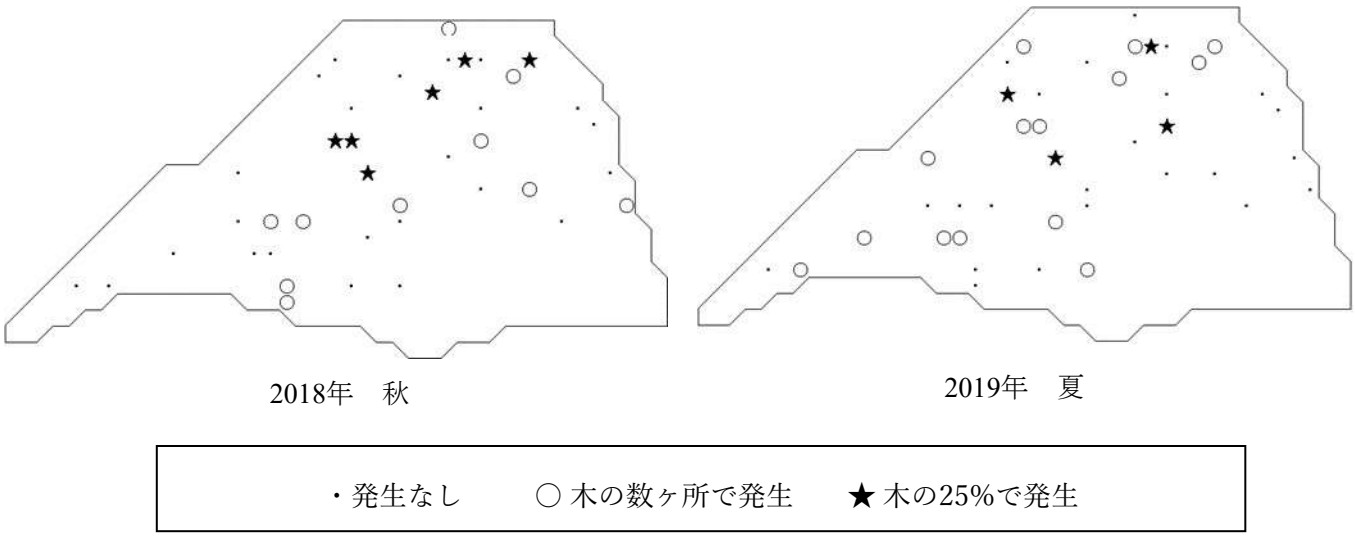

図1. ヤノネカイガラムシ発生状況

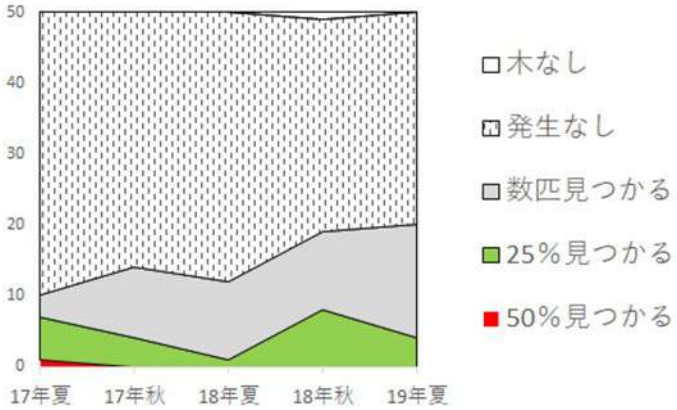

図2. 2017~2019夏秋ヤノネカイガラムシの発生経過

▲2019年10月19日　病害虫および収量調査の講習

図2において、2017年秋、2018年夏に比べヤノネカイガラムシの発生は増加した。その原因としては複数考えられる。まず、2018年度は農薬ゼミメンバーで農薬を散布したが、それが例年の半分の量しか撒けなかったこと。次に、当該年度は木の剪定をほとんどできなかったこともある。今年はこの反省を活かし、農薬散布や剪定作業に意識的に力を入れた。

さて、私はこの病害虫調査を4年間続けてきたのであるが、得られたデータの統計学的意義を見失ってしまった。ミカン木の植え替えや、寿命･風害による枯死などで園全体の状況が絶えず変化していく中、数十年も同じ評価方法で調査を続けてよいのか疑問に思う。

具体的には、①虫や病気の付き方がそれぞれ異なると言われている幼木、成木、老木が一緒くたになっているが、園全体でのそれらの比率とサンプルでの比率に大きな差はないのか、②木全体の割合で評価する従来の方法は今後も踏襲できるか、という疑問である。

どちらもこれまで議論はされてきたものの、結論の出ていない問題である。①について2016年にサンプル木を変更した際の議論では、幼木の数は調整するということになったが、幼木･成木･老木については明確な定義もなく、成木･老木については特に区別をつけず記録をしている。②に関しては、疑問として生まれてもどうアプローチしていけばいいのか分からないできた。この報告誌を読まれた方々に助言いただきたく思う。

農 食料・環境経済学科 4回 おくむら はやと

◆ ◆

昨年のアンケート結果

河原田涼太

昨年度の省農薬みかんアンケートについて報告させていただきます。昨年度は40件の回答をいただきました。多くの方々にご協力いただき、ありがとうございました。

初めに、みかんがお客様のお手元に届いた日について、多くのお客様には発送予定日から1～2日程度で届いているようでした。

次に傷んだみかんの個数について、0個だったのが22件、1個以上だったのが18件で平均1.9個でした。

最後に好みの味かどうかについてです。これについては９割以上の方が好みだったと回答してくださりました。「昔ながらの味がする」、「甘味だけでなく酸味もしっかりとあって美味しい」といった声が多く見られました。40年以上続く省農薬みかん園のみかんの味をしっかりと感じていただけているようです。

一方、「小粒なみかんが多かった」という意見が多く寄せられていました。去年は仲田さんが亡くなってからしばらく生産者がいない状態が続き、例年通りに作業が行えなかったことが影響していると考えられます。今年は、まだまだ手探りながらも大柿さんが作業を行い、我々農薬ゼミのメンバーもみかん園へ赴いた際は微力ながらお手伝いしました。去年よりは大粒のみかんができそうだと大柿さんもおっしゃっていました。ただし、どうしても大小さまざまなみかんができてしまいますので、これが自然なことなのだととらえていただけると幸いです。

また、コメント欄にて仲田さんへの哀悼の意、大柿さんへの応援メッセージをたくさんいただきました。消費者からの応援は生産者にとって大きな励みになります。ありがとうございました。

今年も省農薬みかんアンケートを添付しております。年々アンケート回答数が減少しております。とても簡単なものなので、恐れ入りますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

さて、アンケート報告は以上となりますが、少しだけ私の独り言にお付き合いください。私は農薬ゼミに参加してから今までずっとみかん山での献立係をしています。料理するのが好きで、栄養バランスや彩りを考えるのも面白く、楽しんで献立を考えていました。私が献立を考えるようになってからみかん山での食事が豪華になったと言っていただいたこともあり、その時はうれしかったです。ですが私もあと1年と少しで卒業です。今年は1回生がたくさん農薬ゼミに参加してくれているので、みかん山で料理の手ほどきをしつつバトンタッチしていかなければなりませんね。

農学研究科 修士1回生 かわはらだ りょうた

生産者へのインタビュー

ミカン農家 2 年目の大柿さん

菅野 伸哉

2018 年、園主不在で新年を迎えた省農薬ミカン園。その 4 月に視察に来られた 大柿（おおがき） 肇（はじめ） さんは、ひと月たたぬ間にミカン園を引き継ぐ決断をしました。それからの一年間、初めてのミカン栽培を、大柿さんは、どのような思いで乗り越えたのか伺いました。

（以下は、2019 年 10 月 1 日時点での内容をもとに綴っています。）

Q. 率直に、1 年目のミカン栽培の感想は？

A. ミカン農家として取り組んだというより、（草刈り・施肥・収穫など）目先のことに追われ続けた。農薬ゼミなり、近隣農家なり、書籍なりを頼って乗り越えたが、営農計画があり、栽培に思いが込められたわけではない。ただ、目の前に必死だった。

初めての土地で、初めて取り組むミカン栽培には相当な困難がありました。農薬ゼミでも収穫を手伝い、出荷に間に合わせようと奔走しました。

大柿さんは、ミカン園を引き継ぐ前年、野菜農家として新規就農したばかりでした。農業経験がほとんど無いなか、ミカン栽培に手を挙げた大柿さん。農村交流を目指した農業への思いがありました。（概要は、右図「下津きょうだいみかん山」を参照）。

Q. ミカン園就農当時の思いに変化はありますか？

A. この思いはミカン園を志す際に描いた理想で、あくまで個人的なものだった。（自分の力で）このミカン園を発展させる思いだったが、昨年を通して視野が広がった。（先代の）仲田親子、そのご家族、農薬ゼミ、近隣農家、ミカンを食べてくれる人、多くの人と関わりがあったからこそ、ミカンができていると実感した。農薬ゼミと自身だけでは、できていない。昨年出荷できたのは、省農薬ミカンに関わっている、全ての人が「つづけよう」という方向にむいていたからに違いない。

農村交流に向けた準備が進みつつ、農薬ゼミにとっても、省農薬ミカンを支えている身近な存在の有難みを感じた 1 年でした。

それでは、みなさまのお手元に届くミカンについても伺います。

Q. 今年のミカンの出来はどうですか？

A. 毎年の出来事だが、今年も異常な気象条件のもとでの栽培だった。春先の寒さ、それに引き続く暑さ、7 月の長い梅雨。（ 10 月 1 日現在、）味はまだわからない。まだ、ミカンの味に伸びしろがある。上山さん（大窪のベテラン農家）でも「なにもかも、うまいことはいかへん」と言う。自身の経験も浅く、まだ出来を語るほどには言葉がない。去年、小粒が多く、廃棄するミカンのための作業（収穫、仕分け、廃棄）が多かった。今年は剪定に力を

▲大柿さんの取り組みでみかん山にピザ窯ができました！

https://www.sk-mikanyama.com/blank-2 →

いれたことで、去年に比べ 1.2 ~ 1.5 倍のサイズになっている。手間をかけた分、何かが生まれる、という実感をもった。次の課題は、病気の多さ。作業の見直しや、農薬の試行錯誤に取り組んでいく。

ミカン農家さんとお話していると、「毎年が一年生」と言う方が多いと感じます。それだけ、ミカン栽培の奥が深いということだそうです。

最後に、大柿さんから「省農薬」についてお話いただきました。

次に引き継ぐ人が現れて、省農薬ミカン園が今後100年続いていくものとして、自分のやることは「省農薬」というコンセプトを守ること。そこには、農薬も含めた新しい技術も積極的に取り入れていきたい。その時代、そのときの技術、その人に合わせた「省農薬」というのを引き継いでいきたい。

つづいて、「省農薬」の実践・課題について記したいと思います。

農薬散布、試行錯誤中！（アンケートにてご意見募集）

今年の省農薬ミカン園で使用した農薬を報告します。有機栽培に取り組んでいる農家さんからもご助言いただきました。これまで用いていた農薬よりも毒性の低いもの(*)も使用しています。

1回目（ 4月 4日）

マシン油97（殺虫剤）	60 倍
（＋尿素液肥）	2000 L

2回目（ 7月 12日～ 28日）

*モスピラン顆粒水溶剤（殺虫剤）	3000 倍
ストロビーDF （殺菌剤）	2000 倍
スプラサイド水和剤（殺虫剤）	1500 倍
混合液散布量	6800 L

【アンケートのお願い】

このミカンを食べていただいている方にも、今後の省農薬ミカンについて、**別紙**アンケートでお答えいただきたいことがあります。

“園内で、いくつかの農薬の組み合わせを試してもよいでしょうか？”

“お客様に届くミカンの中に、散布農薬の異なるミカンが混ざることがあります。それでもよろしいでしょうか？”

もし気になることがございましたら、アンケートの自由記入欄に、ご意見をお寄せいただければ幸いです。

（アンケートの背景）

初めてミカン栽培に取り組む大柿さんが、より多くの実践の機会を通してミカン農家として育ってほしい、という思いがあります。

私たちは先代の仲田さんの省農薬栽培を振り返り、大柿さんに伝えながら、大柿さんに栽培を進めていただいています。その中で使用農薬についても、大柿さんと農薬ゼミの間で議論を重ねています。そうは言っても、ミカンの農薬は数十種類もあり、両者とも農業については素人。農薬についても十分な知識を持ち合わせていません。そこで、近隣の有機栽培農家に助言を求めました。ご提案いただいた農薬は、これまでの方針を大きく変更するものでした。今年は、ほとんど従来の農薬散布を踏襲しましたが、来年以降、変更する可能性があります。ただし、全園一斉に変えてしまう訳ではありません。園を区分けして、いくつかの農薬の組み合わせを実践します。私たちの病害虫調査で、病害虫の発生量を比較、調査していきたいと考えています。

みなさまのご感想やご意見をお聞かせください。

今年新たに使用したモスピランは、従来の農薬に比べ、ミツバチ毒性の低い農薬です。省農薬ミカン園には、養蜂家のミツバチがいます。園内のミカンや農家に限らず、周りに配慮した農薬の選択です。

農学研究科 修士2回 かんの しんや

▲省農薬ミカン園のミツバチ（左）と巣箱（右）

2019年ゼミ活動報告　▼･ᴥ･▼

農薬ゼミ4回生の内藤と申します。2019年のゼミ活動についてご報告させていただきます。

今年度の新歓は、例年企画していたみかんケーキ作りなどのイベントではなく、新歓勉強会をメインに行いました。農薬ゼミの魅力である農家さんとの交流や、自主的な勉強会をより前面に打ち出すためです。

通常勉強会では、『食と農の新しい倫理』の輪読会を行いました。わたしたちは何を食べているのか？という疑問に始まる本書を通して、現在の食を支えるフードシステムや、農と食をつなぐ意義について学びました。また、「農を取り巻く新しい流れ」と題したメンバー全員によるスライド発表や、映画『キング・コーン 世界を作る魔法の一粒』の鑑賞なども行いました。

珍しい活動として、6月にはみかん山で行われたジャガイモ収穫祭（実質ピザパーティー）に参加しました。また、京丹後の人々と交流する「京丹後で地方創生を考えるツアー」も開催しました。

農 資源生物学科 4回 ないとう さとる

※以下は、2019年のゼミ活動の日程です。（）内は発表者を表しています。

1/12　仲田尚志さんのお参り、大柿さんと2018年度販売振り返り

1/18　通常勉強会「地方創生~衰退する地方の現状を知り、その解決策を探る~」（内藤）

2/15-17　みかん山（剪定）

3/21-22　京丹後で地方創生を考えるツアー

3/30　4回生卒業記念パーティー

4/4　新歓勉強会「あなたの地元は？今考える地方創生」（内藤、奥村）

4/12　新歓勉強会「とりあえず聞いてみい みかん山2018報告会」（菅野、河原田）

4/19　新歓勉強会「あなたのすぐそばにも？ネオニコチノイド系農薬」（藤井、長瀬）

4/26　新歓講演「ミカン農家 大柿肇さんとの座談会」（ミカン農家大柿さん）

5/3-4　京丹後で地方創生を考えるツアー2

5/10-12　みかん山（新歓）

5/17　通常勉強会「農薬ゼミの活動の源流、その意義」（石田）

5/24　通常勉強会「輪読会『農と食の新しい倫理』第一章」（内藤）

5/31　通常勉強会「輪読会『農と食の新しい倫理』第二章」（長瀬）

6/7　通常勉強会「輪読会『農と食の新しい倫理』第三章」（奥村）

6/14　通常勉強会「輪読会『農と食の新しい倫理』第四章」（菅野）

6/21　講演「みかんの皮の効能について」（アロマインストラクター亀山さん）

6/22　みかん山（ジャガイモ収穫祭）

6/28　通常勉強会「映画鑑賞『キング・コーン 世界を作る魔法の一粒』」（内藤）

7/5　通常勉強会「農を取り巻く新しい流れ」

（河原田、内藤、野寺、長瀬、五百蔵、野下、浜名、田部井、奥村）

7/12　通常勉強会「病害虫調査について」（藤井）

7/26-28　みかん山（夏調査）

8/31-9/1　みかん山（摘果、収量予測）

10/4　通常勉強会「大窪と農薬ゼミ」（石田、菅野、内藤）

10/18-20　みかん山（秋調査）

【新人レポート】

今年は、5人の1回生が参加してくれました！

農薬ゼミの魅力

五百蔵葉月

こんにちは。今年度から農薬ゼミの一員となりました農学部一回生の五百蔵葉月です。農薬ゼミでこれまでしてきたこととその感想を書こうと思います。

私が農薬ゼミに入るきっかけとなったのは、新歓の勉強会とみかん山ツアーでした。新歓期、農薬の安全性をテーマにした新歓勉強会の存在を農業系サークルの合同新歓で知り、興味のあるテーマだったので参加しました。そこで農薬の安全性について深く調べ、それについて考察し、わかりやすく発表する先輩方の姿を見て、かっこいいと思ったことを覚えています。また、みかん山ツアーに関しては、行ったことのないところに行ってみたいという単純な好奇心から参加したのですが、山奥の非日常的な雰囲気や、勉強会のときとはまた違った和やかな雰囲気が気に入り、みかん山から帰る頃には農薬ゼミに入会することを決めていました。そして何より、実際に作物を育てることと、書物などから勉強したり話し合ったりすることの両方ができる点に魅力を感じました。

入会後は週一回の勉強会と、みかん山での夏調査に参加しました。勉強会では周りの人の知識の多さと指摘の鋭さに圧倒されながらも、関心のあるテーマについて知識を得たり意見交換をしたりすることを大いに楽しんでいます。

私は大学に入学した当初は、農業に関わろうとは思っていませんでした。しかし、縁あって農薬ゼミに入会し勉強会に参加するうちに、日本の農業や農村のこれからについて考えたいと思うようになりました。というのも、私の地元は過疎化が進んでいる地域で、今まではそのことに特に向き合おうとしなかったのですが、農薬ゼミでの活動をきっかけに地元をなんとかしたいと思うようになったからです。これからも農薬ゼミの仲間とともに農業について幅広く考えて行ければと思っています。どうぞよろしくお願いします。

農 食品生物科学科 1回 いおろい はづき

◆ ◆

農薬ゼミとの出会い

田部井雅弘

皆様初めまして。農学部1回生の田部井と申します。今年度から京大農薬ゼミに参加させていただくことになりました。

僕が農薬ゼミを知ったのは農業系サークルの合同説明会でした。1回生で履修できる専門科目の少なさゆえの農学部らしい勉強をしたいという願望と、都会で生まれ育ったために芽生えた農業の現場に足を運んでみたいという興味を満たしてくれるサークルを探していたのです。そこで出会った先輩方の農薬ゼミに対する真剣な態度、優しい雰囲気に惹かれて勉強会に参加してみようと思いました。勉強会では年齢に関係なく農薬ゼミのメンバーが質問した

り、意見を述べたりしていてとても良い雰囲気でした。また、取り上げる内容は自分が知らないことばかりで学習への意欲をさらにかきたてるものでした。

夏調査でみかん園に行ったときはまず悟の家までの道の険しさに驚きました。あの道は自分が自動車の免許を取っても運転したくないですね…。また、みかん園の規模の大きさにも驚きました。一方で、多くの木がそうか病になっていたり、多くの木にカイガラムシがいたりと省農薬でみかんを栽培することの大変さを少しだけ感じることができたような気がしました。

勉強会は初めて知ることばかり。みかん園では普段はできない経験ばかり。これからたくさんのことを学んでいき先輩方のような立派な農薬ゼミの一員になりたいと思います。よろしくお願いします。

農 資源生物科学科 1回 たべい まさひろ

◆ ◆

農薬ゼミを通して見る 地域・食・市場

野下智則

4月のはじめ、農薬ゼミの勉強会に行ったとき、実のところ僕は農薬やミカン栽培そのものよりも、地方経済や地域社会に興味があった。ただ一般に経済や社会といったものを考えるときも、基盤となる食が重要な要素のうちの一つであるのは間違いない。地方経済や地域社会について学ぶためには、いつか食や農林水産業について学ばなければならないし、学びたいとも考えていた。

ミカン栽培を通じて地域を見る、という農薬ゼミはそんな僕には渡りに船で、活動に大いに魅力を感じた。地域社会と、食と農とを取り結ぶ存在が身近に存在したのだから。農業は地域特有の土地をどのように活用するのか、何をどのように生産するのかという地域や共同体の様式決定に関わっている。

ここまで考えて、省農薬ミカンというのにはっとさせられた。消費者にとって安全であるのみならず、生産者にとっても安全であるミカンという発想は共同体にとっては、土地を汚染しない、構成員である人を汚染しない、という点で、共同体の資源を守っているのだ。加えて通常の市場を経由して流通していないというのも魅力に映った。

もっとも通常の市場を経由していないのは、一般の農薬を多用したミカンに比べると少々見た目が悪く、通常の市場での流通に不向きだったからで、それが魅力にうつったというのは一見おかしな話に映るかもしれない。

通常の自由市場では、需要と供給によって商品の価格が決定され、価格は絶えず変動する。農家の収入は価格変動の影響を絶えず受け、不安定なものにならざるを得ない。また価格決定において考慮される要素も非常に恣意的である。例えばかつては見た目がきれいなミカンがひたすら称揚され、きれいなミカンに相対的に高い市場価値がつけられていた。しかし現在では、いかにきれいかという価値尺度とは別に、有機栽培のミカンや省農薬／減農薬のミカンといった安全性という価値尺度も登場している。価格決定の要素は時とともに、社会の趨勢とともに移り変わっていくのである。価格は商品そのものの価値を媒介しているのではなく、市場参加者がその商品に認めた価値を媒介しているにすぎないのである。

一方農薬ゼミを通した販売や、各種の生協を通じた販売は、通常の自由市場を通じた価格決定・売買とは異なる経路をたどるように思われる。生産者と消費者が、生産者・消費者双方にとって安全でおいしいミカンが好ましい、という価値意識を一定程度共有している。また価格変動も自由市場に比べて劇的ではなく、生産者の安定性を比較的損なわない形で取引が行われている。

今でこそ生協を通じた販売をはじめとする上記の形態は珍しくないが、先駆的な取り組みの一つとしての歴史を持つ農薬ゼミに参加し、生産にも販売にも微力ながら貢献できるというのは、そうそうできない経験だと思う。

加えてゼミのメンバーの中にも地域独自の農業形態や地方移住に関心のある人がいて、情報が入ってくるのも僕にとってはいい環境だなと感じている。今後が楽しみだ。

文 1回 のした とものり

現状報告

野寺裕貴

こんにちは。今年度から農薬ゼミで勉強させていただくことになりました工学部工業化学科一回生の野寺です。本稿では現在に至るまでの経緯を軽くまとめつつ現状報告をしようと思います。

僕が農業に関心を持ったのは受験期の頃です。大学生になったら起業をすると言っていた友人に触発され僕も何か新しいビジネスチャンスがないか考えていました。その時地元の田園風景を想起しました。人手不足が問題視されている農業でならチャンスがあると思いました。そんなわけで大学では農学分野についても学ぶことを決心しました。

入学後、四月の合同新歓に参加しました。そこで農薬ゼミの先輩方と話をする中で先輩方の知識量に圧倒され、この環境ならうまく勉強できると思い入会を決めました。

以上が現在に至るまでの経緯で以下では現状報告をします。先日農薬ゼミの幹となる夏調査に参加しました。みかん山での作業は二度目ですが、僕はこの二度の作業で現実の厳しさを目の当たりにしました。作業が想像以上につらく繁忙だったのです。“農作業をする”ことに対する認識の甘さを痛感しました。

以上の通り既に超えるべき壁に直面している僕ですが、次の壁は流通・販売だと予想しています。この文章が人目に触れる頃にはその課題について一定の目途が立っていることを期待しつつこの文章を閉じたいと思います。

工 工業化学科 1回 のでら ゆうき

◆ ◆

ミカンの香りに誘われて

浜名俊輔

今年度から農薬ゼミの活動に参加しております、農学部1回の浜名と申します。農薬ゼミに入るきっかけとなったのは、4月の農業系サークル合同説明会です。特に農業がしたい訳でも無かったのですが、何か新しいことを始めてみようという気持ちで説明会に参加しました。そこで農薬ゼミの活動について知り、先輩方のミカンに対する情熱に感銘を受け、参加してみることにしました。

初めて和歌山の省農薬ミカン園に行ったのは5月のことです。行ってみてまず驚いたのは、ミカン園から見下ろす風景です。一面に広がるミカン畑と、その向こうに見える海。これらが見られただけでもミカン園に来られて良かったなと思いました。その時は、近くの風車や神社、選果場などを巡りました。初めての経験が沢山あって、とても楽しかったのを覚えています。

次に省農薬ミカン園に行ったのは7月の夏調査の時でした。病害虫調査を行うのはこれが初めてでした。初めはなかなか害虫が見つけられず、見つけても小さくてよく分かりませんでした。それでも、やっている内にコツを掴んできて、それなりに見分けられるようになったと思います。これでようやく農薬ゼミの一員になれたような気がして、嬉しかったです。

秋、冬の季節になると、ミカン園がどのような景色を見せてくれるのか、今から楽しみで仕方がありません。これからも、できるだけ多くのことを学び、少しでも農薬ゼミの活動に貢献できればと思います。一生懸命頑張ります。

農 資源生物科学科 1回 はまな しゅんすけ

みかん山ピザパーティー

長瀬由佳

2019年5月11日、新入生歓迎企画の一環として、ピザパーティーを開催しました。参加者は総勢21人（＋かい君）という大所帯でした。

▲集合写真

ピザ窯は2019年3月に大柿さんが耐火レンガ・コンクリートブロック・鉄筋などを用いて組み立てられたもので、みかん山のキウイ畑の隣、牛舎横の屋根の下に設置されています。

実は、約3年前から農薬ゼミメンバーの間で「ピザ窯があったらいいね」と話していたのですが、設置場所・コストの関係でお蔵入りになりかけていました。大柿さんの行動力は素晴らしいですね。

▲ピザ窯

薪・温度管理・ピザづくり班の3つに分かれて作業しました。このピザ窯は一層式で、薪を燃やす燃料室と調理する場所が同じになっています。 みかんの枯れ枝を切ってできた薪を燃やしピザ窯の温度を400℃程度に上げた後、薪を奥に寄せて手前にピザを置くスペースをつくります。釜の温度は徐々に下がっていくため、温度を確認しつつ焼いていきます。手作りの生地を平らに伸ばし、オリーブオイルを塗った後、好みの具材を載せてピザ窯へ入れます。

▲みかんの枯れ枝を切って薪に

▲みんなが見守る中、温度を確認

▲ピザ生地を伸ばす様子

当日は天候に恵まれ、5月とは思えないほど暑かったです。タープを組み立て、その下や牛舎の屋根の下など、みんな思い思いの場所で過ごしていました。

▲日差しが強いため、タープを組み立て中

ピザ釜は奥が高温、手前が低温になっているので様子を見ながらピザの向きを変えます。こんがり焼けた生地・具材の香りが辺りに漂い始めました。焼きあがったピザを8等分して、どんどん取り分けていきます。しらす・マルゲリータ・野菜とウインナー・照り焼きチキン・果物とクリーム・マシュマロチョコといった様々な種類のピザを焼きました。

▲高温で一気に焼き上げる

▲野菜とウインナーのピザ

▲ピザ職人大柿肇さん

▲しらすピザ（チーズとしらすの相性抜群！）

焼きたてのピザはどれもとてもおいしかったです。特にしらすピザは、しらすの塩気とチーズの濃厚なうまみが、刻みのり・シソでさわやかにまとめられていて美味しかったです！！

今回、みかん山に新たな魅力が生まれたことを実感しました。みかんの収穫・販売時期は忙しく、余裕がなくなってしまいますが、またこのようなイベントの機会を作りたいと思いました。

農 地域環境工学科 4回 ながせ ゆか

交換留学生との交流

飯塚益美

このコラムでは、私が農薬ゼミに参加して初めて出会った交換留学生との交流について書こうと思います。この出会いは英語に関心がある私にとって、貴重で勉強になっただけでなく、とても楽しいものでした。私自身英語での会話に慣れておらず、上手く表現できないこともあり読みづらいかもしれませんが、一生懸命書くので温かい目でご一読頂ければ幸いです。

さて、今回登場する交換留学生はスイス出身の Krystyna Ana Pietrzak （クリスティーナ・アナ・ペトリザーク）さん、通称キキさんです。キキさんはローザンヌ大学経済学部の三回生で、京都大学に半年間勉強に来られました。京都大学での大学生活を終え帰国される前に、キキさんが農薬ゼミに参加したことや、みかん園に行ったことについてのインタビューをしたので、その内容を書きたいと思います。

飯塚：どのようにして農薬ゼミを知りましたか？

キキ：京都大学吉田キャンパスの京都大学留学生ラウンジきずなというところで京都大学生の農業系サークルについての情報を下さいと頼んだところ、「サークル大百科」という冊子を見せて貰い農薬ゼミがあることを知りました。

飯塚：初めて農薬ゼミに来られたとき、何を期待して参加されましたか？

キキ：特にこれを期待してというのはなかったです。強いていうなら、やったことがないことをやってみたかったです。特に農場に行って農業のお手伝いをしてみたかったですね。

■初めて参加されたゼミ活動■

2019年4月12日に新歓企画で「とりあえず聞いてみい、みかん山報告会」と題して新入生向けにみかん山の報告会を行いました。キキさんはそこで初めて農薬ゼミの活動に参加されました。

飯塚：ゼミの雰囲気はどうでしたか？

キキ：とても楽しくて良かったです。みんな親しみやすく、私を快く迎え入れてくれました。みんな熱心に（私の話す）英語を理解しようとしてくれたり、英語で話そうとしてくれたりしてとても感動しました。

飯塚：報告会の中で「農薬ゼミはみかん販売関連もお手伝いされているそうですが、それに対する給料は支払われているのですか？」というような質問をされていたと思いますが、キキさんは専門が経済学なので農薬ゼミと省農薬みかん園との間の流通システムに興味があるように感じました。農薬ゼミはゼミの運営費（収穫や調査のための和歌山までの交通費、新入ゼミ生受け入れの準備費用など）をみかん販売の売り上げの一部（農園から農薬ゼミに支払われる代金）で賄っています。このシステムについてどう思いますか？

キキ：この方法は販売を通して行われるとても平等な（お金、サービスの）やり取りだと思います。そしてこの方法は農薬ゼミに関心のある新入生に対して共に学べる機会を与えてくれることにもなり、ゼミ生は活動費を心配することなくゼミ活動を行うことが出来ると思います。他の京大サークルは（農薬ゼミに比べ）活動費の個人負担費用が高かったですから。

▲2019年5月11日みかん山ツアーにて、写真左がキキさん、右が飯塚さん

■和歌山のみかん山ツアー■

5月10日から12日にかけて新入生向けのみかん山ツアーを行いました。

飯塚：みかん山ツアーの一番の思い出はありますか？

キキ：草刈りがとても好きでした。樹木の香りや木漏れ日がとっても気持ち良かったです。

飯塚：みかん山ツアーではどのような感想をお持ちですか？

キキ：みかん山ツアーの期間中喉が痛くてあまりお話出来なかったのが少し残念でしたが、それにもかかわらずこの経験は私にとって最も貴重な日本での思い出になりました。私はゼミ生の方々が行なっている調査や、みかん山の歴史に関心を持ちました。また、みんなが食事をしたり笑いあったりしているのを見るのもとても楽しかったですし、ゼミ生、関

係者の皆さんはお互い気遣い合ったり尊敬し合ったりするコミュニティをお持ちだと感じました。私は省農薬みかん園の可愛いかい君（オーナー大柿さんの愛犬）も大好きです。

▲かい君とキキさん

■ゼミ活動、みかんツアーを通して■

飯塚：このゼミ活動やツアーを通してあなたの大学での講義、または日本での生活に役立ったことはありましたか？

キキ：私が一番多く学んだこととして、日本人がどのようにして人に親切にしたり、尊敬し合ったりするのかについて学ぶことができました。ゼミ員は全員に対してとても親切で、誰に対しても壁を感じることはなかったです。この経験を通して、私はこの先出会う人々にもっと親切にしようと思いました。そして日本語も上達できました。私にとってこれはとても役に立つことでした。

インタビューは以上です。キキさんが農薬ゼミに参加してこんなに多くの事を思ってくれていてとても嬉しく思いました。私にとっても、キキさんにとっても、とても良い機会となり、幸せな時間を過ごすことができました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

いいつか ますみ

【編集後記】

ひと口に「みかんを売る」と云っても、みかんの状態はもちろん、一緒にやる仲間も、自分の境遇も毎年違ってくる。そこが難しく、時に厳しく、また面白いのだと身に沁みる此の日頃。（藤井黎）

ニュースレターを読んでいただきありがとうございます。例年白黒印刷でお届けしていたニュースレターですが、今年はカラー印刷です。納期を変更したり、キャンペーンを利用したりした結果、カラー印刷でも価格は例年と同程度に抑えておりますのでご安心ください。今年私は表紙・編集を担当しました。みかん山の魅力が伝わるように頑張って作ったので、楽しんでいただけると幸いです。編集作業を経て、消費者の皆様のご支援があってこそ、私たちは活動を続けていけるのだと実感しています。ご意見・ご感想があれば、アンケートの自由記述欄へお寄せください。先輩方から受け継いだものを、頼もしい新メンバーたちへ伝えていきたいです。これからもよろしくお願いします。（長瀬由佳）

▲2018年9月2日　悟の家にて

NEWS LETTER vol.31

2019年11月5日

発行者：京大農薬ゼミ

〒606-8227

京都市左京区田中里ノ前町21 石川ビル305

TEL&FAX：075-711-4860

E-mail：noyaku@yahoo.co.jp

HP：http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP

Facebook：@noyakuzemi

郵便振替口座番号「01070-0-36598」

加入者「農薬ゼミ」

省農薬ミカンとは

和歌山県海南市下津町において、農薬をできる限り減らして（省農薬）栽培しているミカンです。1967年7月14日和歌山県海南郡（現：海南市）下津町大窪で、当時17歳の松本悟さんが農薬中毒で急逝したことが省農薬ミカン誕生のきっかけとなりました。

悟さんは省農薬ミカン園を拓いた故仲田芳樹さんの甥にあたります。害虫防除のためにフッ素系の農薬ニッソール（日本曹達株式会社（以下、日曹）製造販売、現在は製造中止）を散布したのち中毒にかかり、3日後に亡くなりました。悟さんのご両親（故松本武さん・松本エツ子さん）は中毒の原因は農薬の安全性の問題であるとし、1969年にニッソールを製造販売した日曹と、それを許可した国を相手取って民事訴訟を起こしました。

当時は、高度経済成長のまっただ中であり、大量生産・大量消費が大きな価値であるという考えが大勢を占め、大量の農薬を使って多くの作物を作ることに何の疑問も抱かない時代でした。そんな時代背景の下、農薬会社と国を相手に損害賠償を求めた裁判は、1977年和歌山地裁で完全敗訴となります。しかし1978年に大阪高裁に控訴し、1984年の最終弁論のあと1985年に和解することとなり、日曹から和解金（賠償金と考えています）が支払われました。最後まで国の責任は問われませんでしたが、日本で農薬会社が公に和解金を支払った裁判はこれが初めてであり、大きな成果でした。17歳で亡くなった悟さんが、17年間の裁判をご両親と共に闘った結果でした。

▲松本武さん・エツ子さん

裁判が始まって5年後、芳樹さんが新しいミカン園を拓くこととなり、農薬をなるべく使わずに栽培してみようと始めたのが、省農薬ミカン園です。慣行のミカン園では年に十数回の農薬撒布を行うのが普通とされていますが、省農薬ミカン園では、多くても2～3回程度に散布を減らして栽培しています。開園後2～3年でミカンの出荷が始まりましたが、当時のミカン園は、樹が枯れてしまうほど多くの病害虫が出ており、また雑草や土の課題もありました。農薬ゼミは、年に数回ミカン園に通い、1978年から年2回の定期調査を開始しました。1986年には天敵の導入を行うことで害虫が激減し、大きな成果が得られました。現在も害虫が少ない状態を維持できています。また土壌の改良や間伐、雑草対策など、生産者の芳樹さんと共に試行錯誤を行ってきました。

芳樹さんは2013年に亡くなられましたが、ミカン園は2008年頃から息子の仲田尚志さんに引き継がれ、作る人にも食べる人にも安心な、そして美味しいミカンを目指して省農薬栽培に取り組まれました。

しかし、2017年12月に尚志さんが逝去されたことで、ミカン園は突然後継者問題に直面します。何とか省農薬ミカン栽培を続けていきたいという思いに、たくさんの方が支援してくださり、新たに大柿肇さんと共に栽培を続けることとなりました。

省農薬ミカン園が誕生して45年。農薬に対する社会の認識は変化し、多くの方々に省農薬ミカンを味わっていただけるようになりました。しかし、日本のミカン農家、そして日本の農業を取り巻く状況は大きく変化し、私達のミカン園と同じく後継者問題を始めとした新たな課題を抱えています。私たちのミカン園もその渦中にあります。農薬ゼミは省農薬ミカン園を通して、これからの農業のあり方を考えていきたいと思います。

引き続き省農薬ミカンを応援していただきますようお願いいたします。

（文責：和泉賀津子）

▲2019年10月20日　悟の家にて